

日本語の格助詞

～ポルトガル話者の間違い～

ビトリア ミキ オオクボ

はじめに

格助詞というのは外国人学習者が日本語の勉強をし始めると、間もなく教わるものであるが、どうして上級レベルになっても間違え続けるものであろうか？

今までブラジルで日本語の勉強を何年かしてきたが、日本へ来て自分の話し方に少し気をつけてみたらときどき間違った格助詞を使っていることに気が付いた。

日本人は問題なく使える文法的な単語なのに、どうして外国人は間違ってしまうのか、と考えさせられた。多分、ブラジル人がポルトガル語を話す時、男性名詞や女性名詞にそれぞれの定義詞を迷わずに付けられることと同じように日本人は格助詞の使いわけができるのであろう。この問題はその二つの言語を母国語としていないと使いわけることが難しい。

そしてこのレポートにはどうして外国人は格助詞を間違えるのか、主に、どうしてポルトガル語話者は場所を表す「に」、「で」および「を」を間違えるのか、について自分なりの考えを書いた。

日本語の格助詞とポルトガル語の前置詞

助詞は付属語で活用がなく、体言や用言などの自立語について文節を作る。また、文節と文節の関係を示して、ひとつの働きを決める単語でもある。

ポルトガル語には日本語の助詞と同じような役目をはたす語はあり、それは「前置詞」(preposicao)である。しかし品詞から考えなければ日本語の何に当たるか分からない。

ポルトガル語の「前置詞」は二つの語の中で従う語と従わせる語を決める。そして、後者は名詞、代名詞、形容詞、副詞、動詞と感動詞がする役割である。

前置詞は二種類に分かれ、「単純前置詞」というのは一語だけで、para、a (に) por (を、で)、em (に、で)、com (と) などの単語である。「群置詞」は二つ以上の前置詞で、ate a (まで)、para com (に)、などである。

田中佩刀氏によると、助詞の動きはきわめて重要なので、論理性がとくに要求される場合は別として、日常会話では、助詞の使い方さえ間違っていなければ、語順が多少乱れていても頭のなかで直して、正しい語順に組み替えれば、理解できる。

例：作った・夫に・昨日・夕食を・彼女は

この文の程度ならば理解できない日本人はいないが、中国語やベトナム語をこのように

崩したら、紙に書いて考えないかぎり、ほとんど意味が通じないという。

ポルトガル語は文節の順番を自由にできるラテン語から生まれたので、ある程度まではやはり自由にできる。

上の文の程度だったら、どんな構造をしても大部分は文法的である。しかし、日本語のように、主語を表す「は」、「が」や直接目的語を表す「を」などはないので、文節の組合せによって、分かり難くなる例はある。しかし、分かり難くなくても非文法的ではない組合せもある。

田中佩刀氏の「日本語概説」に書かれている通り、日本語には助詞が必要であるようにポルトガル語では前置詞は欠かすことができない。しかしポルトガル語の前置詞は日本語の格助詞より必要な語である。なぜかというと 会話の時、日本人が格助詞を使わないことは珍しくない。

例： 私、買物の帰り、あの道通ってきた。

私 (は) 買物の帰り (に) あの道 (を) 通ってきた。

けれども、ポルトガル語では話し言葉でも前置詞を使わないことはない。上の文を前置詞なし訳すと、変な文になってしまうだけでなく、意味が二通りの解釈ができるようになってしまうことすらある。

例： Na volta das compras eu passei por aquela rua.

(私は買物の帰りにあの道を通った。)

例： Na volta das compras eu passei () aquela rua.

(私は買物の帰りにあの道を通りぬこした。)

間違いやすい格助詞

外国人にとって「が」と「は」、「が」と「を」、「に」と「で」、「に」と「を」など使い分けるのは非常に難しい問題である。

外国語を勉強するとき必然的に学習者は母国語と比較してしまうので、ポルトガル語話者であれば格助詞のある使いかたを不思議に思う。それは、主語の「が」が能力、希望、可能、感情、感覚も表す、ことである。そして、ポルトガル語の主語に前置詞は付かないし、感情を表すには間接目的語 (objeto indireto) を使う。また感覚は目的語の一種で表されているが動詞ではなく、名詞や形容詞に付く (complemento nominal)。能力、欲望と可能を表す文は直接目的詞で表されているので、「が」はポルトガル語でいろいろな役割をもっている。

ブラジル人に最も難しいのは「を」である。ポルトガル語の直接目的語でありながら、「道を通る」と「バスを降りる」という限られた場所を表すからである。「道を通る」の格助詞は「por」に当たるが、「バスを降りる」の場合は「de」に当たり、「バスから降りる」といういい方になってしまうからである。

多分、格助詞の中で一番広い範囲で使われているのが「に」であろう。しかし、この範囲が広すぎて、他の格助詞の代わりに「に」を使いたくなってしまうのが外国人の学習者である。「に」は場所、時間、方向、間接目的、などを表す。

外国人が時間を示す「に」を勉強する時、時間の意味を持っている単語のあとにすべて「に」をつけてしまうことがあるので、次のような間違いをする学習者は少なくない。

例1: ずっと一年間に住んでいますから、全然本当のと自分の考えのことが違います。

例2: 毎日に大学で学生たちはたばこを吸ってよく見えるし、ときどき授業中の学生は発表しているのに、先生が2～3本たばこを吸ってつづいています。

例3: 私は日本へ来る前に、国で少しドルを準備して、持ってきましたが、今までまだ使いませんでしたから、貯金したほうがいいと思って、ある日に銀行へ持っていきました

「に」は動作・作用の行なわれる時を示す場合、「今日（ ）新宿へ行く」と「日曜に新宿へ行く」のように使う時と使わない時がある。その上、両方の形が用いられるものもある。また、「午前中勉強する」と「午前中に勉強する」のように、「に」を伴わないかによって意味が異なることもある。

動作・作用の行なわれる時を表す名詞が「に」を伴うかどうかは、次の表のように、それぞれ語の性格によって分類されている。

「に」を使わないもの

今日	本日	明日	昨日	一昨日	明後日
今朝		今晚	昨晚		明晩
今		さっき	いつ		
今週		来週	先週		
今月		来月	先月		
今年		来年	昨年		
毎日		毎週	毎年		いつも

「に」を使うもの

10時に	6時15分に	8時半に
3日に	2月に	1976に
日曜日に	休日に	休みに
江戸時代に		

両方の形を使うもの

正月 (に)	暮れ (に)		
春 (に)	昼 (に)	午後 (に)	夜 (に)
～ごろ (に)	～とき (に)	～うち (に)	～まえ (に)

「に」を使うか使わないかによって味のかわるもの

午前中 (に) 3年間 (に) ～あいだ (に)

外国人に時間を示す「に」を教える時は丁寧にたくさんの例を挙げて教えなければ、上の例のような文を作ってしまう。時間を表す言葉なら、片っ端から「に」を付けようとするだろう。

場所を表す「を」、「に」と「で」

もう一つの問題点は場所を示す「に」である。「を」、「に」、「で」は場所を示すが、それぞれの使い方がある。しかし、日本語上級レベルの学習者でも、この三つの中一つ選ぶ時、戸惑ってしまうこともある。

「日本文法研究」で久野暉氏はこの三つの使い方を説明している。

名詞＋ヲ： 動詞によって表される運動か、名詞によって表される距離は空間の全範囲（感いはかなりの部分）にわたって続けて一方向に向かって行なわれることを示す。

名詞＋ニ： 動詞によって表される場所が、運動の目的地であることを示す。

名詞＋デ： 動詞によって表される運動が、名詞によって表される距離、または空間の極く一部分で、かならずしも連続的、一方向的でなく行なわれることを示す。

ポルトガル語とスペイン語話者の間違い

では、以下ポルトガル語とスペイン語話者の作文に生じた「を」、「に」、「で」の違いの理解について少し考えてみたい。

例1*： 道できれいな花と大きな木があります。（中級）

存在を表す「ある」、「いる」のような動詞の場合は格助詞「に」を必要とする。だから、「道であります」ではなく、「道にあります」でなければならない。しかし、「に」はポルトガル語とスペイン語の「para」と「a」、方向を表す前置詞、そしてポルトガル語の「em」とスペイン語の「en」、動作が行なわれる場所を表す前置詞である。けれども「で」も「em」と「en」の意味をもっているので、学習者が「で」と「に」の使い分けができなくなるのは少なくはない。

そして、この例1の場合は、正解の文も「で」を使った文も、ポルトガル語に訳したら同じようになってしまう。

例1： Existem no caminho flores bonitas e grandes arvores.

次は、これと反対のケースで「で」のところを「に」にしている文について考えてみる。

例2*： 日本には季節によって景色が変わる。（上級）

「変わる」という動詞は出来事を表すので、動作、出来事を表す動詞では格助詞「で」が付かなければならない。この例1の例によく似ていて、ポルトガル語に訳すと、間違っている文も正解の文も同じようになってしまう。

例2: No Japao a paisagem se transforma dependendo da estacao .

例1と例2の例の前置詞「No」は元々「em」である。ポルトガル語には男性名詞と女性名詞に分かれているので、「em」が男性名詞の前に付くと「no」になる。同じように、女性名詞の前だと「na」になる。

例3* : 二人は鳥のはねの上で歩いて会いに行きます。

この文は七夕祭りに関していて格助詞をうめる練習で、私が間違った例である。この場合、「で」を使うと、二人は鳥の羽の上を行ったり来たりしている、あるいはぐるぐる回りながら歩いているというイメージが浮かぶ。しかし、一年に一回しか会えない恋人同士は鳥の羽の上でぶらぶらしていないで、一方向に向かって相手に会えるまでずっと真直ぐ歩いていくのだろう。だから「鳥の羽の上で歩いて」ではなく「鳥の羽の上を歩く」である。

しかし、一年に一回しか会えない恋人同士だったら、「歩いて」ではなく、一層のこと、「走って」行くのではないだろうか??

この文をポルトガル語に訳すと、「で」か「を」を使うことによって、ニュアンスが少し変わってくる。

例3・1* : 二人は鳥のはねの上で歩いて会いに行きます。

(Os dois vao se encontrar andando nas asas do passaro)

この場合は、鳥の羽の上を歩いているうちに二人は会えるだろう、というニュアンスがある。けれども、「を」を使っている文を訳したら、二人は羽を道として、会いに行くという意味をもつ。

例3・2: 二人は鳥の羽の上を歩いて会いに行きます。

(Os dois vao se encontrar andando pelas asas do passaro)

例4* : 幸子さんも同じ所で私の横に待っていました。(上級)

この場合「いる」は存在を表す動詞ではなく、「待つ」に付いて現在形を表す補助動詞なので、場所を示す格助詞は「に」ではない。「待っている」は動作を表しているので、この文には「で」が付く。

「で」は事件が起こる場所や方法、理由をあらわす。日本語では「で」という一つの助詞にこれら三つの意味があるが、ポルトガル語では、それぞれの意味に別の前置詞を使わなければならない。

場所を表す「に」は「para」、「a」、「em」に当たり場所【で】は「em」だと普通ブラジルでは教わる。それに従えば、「横に待っている」はどこがおかしいのかポルトガル語話者はわからない。この文を訳すと、正解の文も間違っている分も同じようになっ

(6)

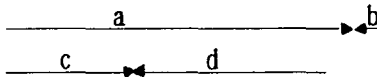
てしまう。

例4* : Sachiko tambem estava esperando no mesmo lugar, ao meu lado.

この場合の「ao」は前置詞「a」プラス男性定義詞「o」を一緒にした単語である。日本語学校などで格助詞などを勉強すると、直接ポルトガル語に訳すだけではっきりした使い方を教えないことが多い。おそらく、助詞などは訳さず、使い方を教えて、学習者に理解させ、覚えさせるほうが効果的であろう。

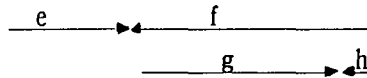
次の間違いのある文と正しい文の統語分析をして誤りの理由を説明する。

例5.1* : 徳島大学で専門の勉強をしに来て, 「もう3ヵ月になります」



例5.1 : Ja fara 3 meses], depois que vim fazer meus estudos especializa-on Universidade de Tokushima.

例5.2 : 徳島大学に専門の勉強をしに来て, 「もう3ヵ月になります」。



例5.2 : [Ja fara 3 meses] depois que vim para a Universidade de Tokushima fazer meus estudos especializados.

「で」を使うと「徳島大学」は「勉強をする」にかかっている。5.1の場合矢印 (a) が動詞「来る」(b)にかかっている。これをポルトガル語に訳すと、矢印 (d) の部分が強調されることになる。これに対し5.2では 「徳島大学に来た」ことが強調されている。

5.1の間違っている文をポルトガル語に訳すと、5.2にないニュアンスでてくることに注意したい。

格助詞の間違いにあたる語彙の問題

以上留学生の作文を見たが、以下会話での私の間違いについて調べたい。

広島大学の友人と話していて、「彼は高校に教えているの」と私は聞いた。すると彼は「高校で教えている」あるいは、「彼は高校生に教えている」と言った方がいい、と注意された。

「に」は時間、場所、方向、間接目的を表すので、私の言った文では「高校」は目的語になってしまう。「彼は高校に教える」としたら、彼は学校の建物に向かって、国語や算数を教えていることになってしまう。しかし、この文が間違っていたことを認めるまで、かなり時間がかかった。正確な文では伝えなかったニュアンスが含まれていないと思ったからである。

例1 : 彼は 高校 で 教える

ele colegial no ensina

Ele ensina no colegial

例2 : 彼は 高校生 に 教える

ele os estudantes do colegial para ensina

Ele ensina para os estudantes do colegial

aos

例3* : 彼は 高校 に 教える

ele o colegial para ensina

Ele ensina para o colegial

ao

Colegialというのは日本語の「高校」に当たるだけではなく「高校レベル」という意味もある。現在ブラジルで使われているポルトガル語では NIVEL (レベル) という言葉が省略されてるのである。

この場合「に」の間違ひは単なる文法の問題にとどまらず、語彙の問題にも関係してくる。ポルトガル語では「高校レベル」は間接目的語 (objeto indireto) になることができる。しかし、日本語では「の学生」という言葉を付け加えなければ、文として成り立たない。文法の問題と思っていたことが、実は語彙の問題だったということか？

二つの言語が異なっているということは言葉だけが違っていることではなく、その言語の構造や言い回しなども違っているということである。西洋では昔から「言語は文化の鏡ある」と言い続けられてきた。異なった文化は比較するものではないように、言語の比較もできないはずである。けれどもどんな学習者でも母国語を持っているので、必然的に比較してしまうことの結果として、間違った文ができてしまうことである。

私はブラジル生まれの日系二世なので、ものごころのついた頃から家では日本語、外ではポルトガル語を聞いていて、どちらかの言語を先に習ったのか分からない。両親は日本生まれなので先に日本語を耳にしたはずだ。

しかし、ポルトガル語を話す時は考えるのが早いので、考えて話しているという感じはしないが、日本語を口にするときは、何語で考えているのか、自分でもよく分からない。結局、誰でも育った所の言語が一番話し易いのではないだろうか？

おわりに

バイリンガルというのは世界に一人もいないだろう。二つの言語の使い方が非常にうまくても、どちらか一つの言語の方が上手であるはずだ。一番身に付いている言語は母国語なので、日本語を母国語としていない学習者だったら、どんなに勉強しても日本人のように日本語を使えないことが事実である。けれども、学習者にこういう問題を越えさせ、自然な日本語を使えるようにさせるのが日本語教師の役目ではないのであろうか？

(8)

格助詞は日本語で大切な単語なので日本語を自然に話せる一つのポイントは格助詞を正確に使うことと、日本人のようにときに応じて省略することであろう。しかし上級レベルのほとんどの学習者がそれはまだできないので、一人一人の日本語教師が格助詞を教える授法を研究する必要があるのではないだろうか？

参考書

今井幹夫	「わかる日本語の教え方」	千駄ヶ谷日本語教育研究所
久野暁	「日本文法研究」	大修館書店
田中佩刀	「日本語概説」	文化書房博文社
寺村秀夫、ほか	「ケスタデイ日本文法」	桜楓社
教師用日本語教育ハンドブック3「文法Ⅰ」		国際交流基金